



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語に於ける母音調和
Author(s)	知里, 眞志保
Citation	北海道大學文學部紀要, 1, 101-118
Issue Date	1952
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33108
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_P101-118.pdf



アイヌ語に於ける母音調和

知里眞志保

アイヌ語に於ける母音調和

知里眞志保

内容目次

- 一 問題の所在。——〔1〕自動詞又は語根に附いて他動詞を造る母音の接尾辭。〔2〕名詞の概念形に附いて人稱形の語幹を造る母音の接尾辭。〔3〕本稿の目的。
- 二 自動詞に附いて他動詞を造る母音の接尾辭。——〔4〕『ユーカラ語法摘要』に擧げてある例。〔5〕母音の接尾辭を除いて得られる自動詞の構造。
- 三 語根に附いて他動詞を造る母音の接尾辭。——〔6〕「子音＋母音＋子音」型の語根。〔7〕語根に母音の接尾辭が附いて出來た他動詞の全例。
- 四 他動詞の形成に見られる母音調和。——〔8〕語根の母音と接尾辭の母音の關係（第一表）。〔9〕他動詞形成に見られる母音調和。
- 五 名詞の人稱形の語幹形成に見られる母音調和。——〔10〕名詞の概念形に附いて人稱形の語幹を造る母音語尾。〔11〕單音節名詞の音節構造。〔12〕開音節の單音節名詞に於ける人稱語幹の形成法。〔13〕その人稱語幹の全例。〔14〕閉音節の單音節名詞とその人稱語幹の全例。〔15〕概念形の母音と語尾の母音の關係（第二表）。〔16〕名詞の人稱語幹の形成に見られる母音調和。

六 結語。

一 問題の所在

〔1〕アイヌ語の他動詞の中には、母音ア・イ・ウ・エ・オ（*a, i, u, e, o*）を語尾として成立している一群があつて、次の例の如く殆ど二音節のものばかりである。

「マカ」	mak-a	開ける
「アシ」	asi	立てる
「チャリ」	char-i	散らす
「ヤク」	yak-u	潰す
「テス」	tes-u	そらす
「カイエ」	kay-e	折る
「ヘウエ」	hew-e	傾ける
「コモ」	kom-o	折り曲げる

この類の他動詞から母音語尾を取り去れば、残りの部分はもはや他動詞としての存在を保つことはできない。その或者は自動詞となる。

「アシ」	as	立つ
「ヤク」	yak	潰れる
「カイ」	kay	折れる

この場合、母音語尾は、自動詞に附いてそれを他動詞化する働きをなしているのである。

また他の者は、母音語尾を取り去れば、もはや單獨では存立し得ない所の意義單位となり、諸種の動詞の中に意義單位として見出されるにすぎない。

「マク」	mak-	
「マクケ」	mak-ke	開へ
「マクコサヌ」	mak-kosanu	ぎへと開へ
「マクナタラ」	mak-natara	ぎへと開つてゐる

「チャル」 char-

「チャルケ」 char-ke 散らばる

「チャルコサヌ」 char-kosanu ばくと散る

「テシ」 tes-

「テシケ」 tes-ke なる

「テシコサヌ」 tes-kosanu ぐくとなる

「テシナタラ」 tes-natara ずうくと反っている

「ヘウ」 hew-

「ヘウケ」 hew-ke 傾へ

「ヘウコサヌ」 hew-kosanu ぐくと傾く

「コム」 kom-

「コムケ」 kom-ke 曲へ

「コムコサヌ」 kom-kosanu ぐくと曲る

これら mak, char, tes, hew, kom の類をしばらく語根と名づけることにする。すると、この場合の母音語尾は、語根から他動詞を形成する造語的接尾辭と見ることが出来る。

以上の如く、母音語尾ア・イ・ウ・エ・オ (a, i, u, e, o) は、次の二つの働きをする。

(イ) 自動詞に附いて他動詞を造る。

(ロ) 語根に附いて他動詞を造る。

他動詞を造るという點に於ては、(イ)も(ロ)も全く同じ働きをしている。この様に同一の機能をもつものが、ア・イ・ウ・エ・オの五つに分れてゐるのは、何故であらうか。これが一つの問題である。

「2」もう一つの問題は、名詞の方にも、概念形から人稱形の語幹を形成する際に、同様の現象が見られることである。アイヌ語の名詞には人稱觀念の有無による語形變化——概念形と人稱形の區別——が存在する。今ここに、「ホン」 hon (腹) という名詞を例に取つてみよう。こ

の語は、日常會話の言語に於ては、次の如く人稱に關して語形變化をする。

(イ) 「ホン」 hon (腹)

(ロ) 「ホニ」 honi (彼の腹) (彼らの腹)

(ハ) 「エホニ」 e-honi (君の腹)

(ニ) 「エチホニ」 echi-honi (君らの腹)

(ホ) 「アホニ」 a-honi (あなたの腹) (あなたがたの腹)

——これは第二人稱の敬相 (honorific) の形である。

(ヘ) 「クホニ」 ku-honi (私の腹)

(ニ) 「チホニ」 chi-honi (私どもの腹)

——相手を前にしてそれと區別して云う「我々」。いわゆる「對

立相の我々」 exclusive 'we' である。

(ロ) 「アホニ」 a-honi (私たちの腹)

——相手をも含めて云う「我々」。いわゆる「包括相の我々」 inclusive 'we' である。

これらの内(イ)に於ては「腹」という概念のみが示され、(ロ)以下に於ては「腹」という概念の上に「彼の」「彼等の」「君の」「君達の」「私の」「私共の」「私達の」というような人稱觀念が累加的に示されている。(イ)の「ホン」(hon)の如く名詞が概念のみを表わす場合の形を私は概念形と呼び、(ロ)以下の「ホニ」「エホニ」「エチホニ」「クホニ」「チホニ」「アホニ」等の如く概念と共に人稱觀念をも示す場合の形を私は人稱形と呼ぶことにしている。

ところで、人稱形は概念形から直接に造られるのではなくて、概念形に母音の接尾辭が附いて人稱形の語幹が出来、更にそれに人稱接頭辭が附いて人稱形が出来するのである。概念形の「ホン」(hon)に母音の接尾辭「イ」(i)が附いて人稱形の語幹「ホニ」(honi)が形成され、それに「ク」(ku)「チ」(chi)「ア」(a)「エ」(e)「エチ」(echi)及び

ゼロの接頭辭が附いて、第一人稱單數形「クホニ」(kuhoni)、同複數對立形「チホニ」(chihoni)、同包括形「アホニ」(ahoni)、第二人稱單數形「エホニ」(ehoni)、同複數形「エチホニ」(echihoni)、第三人稱單複形「ホニ」(honi)等が成立しているのである。

さて、概念形に附いて人稱形の語幹を形成する母音の接尾辭には、上記の「イ」(i)の他に、「ア」(a)も「ウ」(u)も「エ」(e)も「オ」(o)も存在する。この五つの母音の接尾辭は概念形に附いて人稱形の語幹を造るという機能に於ては全く同價値である。然らばその何れの母音をも任意に用いてよいかというに、それは單語によつて一定している。同じく「腹」を意味する語でも、「ホン」(hon)は必ず「ホニ」(honi)となり、「ツイ」(tui)は必ず「ツイエ」(tuy-e)となる。また同じく「中」を意味する語でも、「テム」(tom)は必ず「トモ」(tom-o)となり、「ツム」(tum)は必ず「ツム」(tum-u)となる。「尾」を意味する「サル」(sar)は「サラ」(sar-a)となり、「葦原」を意味する「サル」(sar)は「サリ」(sar-i)となる。すなわち、分りやすく表にして掲げれば次の通りである。

sar (尾)	—	sar-a (彼の尾)
sar (葦原)	—	sar-i (彼の葦原)
hon (腹)	—	hon-i (彼の腹)
tum (中)	—	tum-u (彼の中)
tuy (腹)	—	tuy-e (彼の腹)
tom (中)	—	tom-o (彼の中)

この様な區別の根據は、一體どうあるのか。これがまた一つの問題である。

〔3〕本稿に於ては、これらの問題を闡明し、それに關聯して、アイヌ語に於ける母音調和 (Vocal harmony) の存在を説いてみたと思ふのである。

(註1) 稀に三音節のものもあるが、それらも語原にさかのほれば二音節に還元できるものばかりである。例えば *pirasa* (ひろげる) は複數が *piras-pa* であり、自動詞が *piras-ke* (ひろがる) であるが、これはどうも複合語らしく思われる。cf. *chi-pira-tek-ka* (ひろがる) (『ユーカラ研究二』 P. 636)。また *ekote* (殺す) も自動詞は *ekot* (死ぬ) であるが、これも本来は複合語であつたらしく思われる。それについては後でふれる。→ 二、〔4〕、註3、參照。

(註2) ここに掲げたのは北海道西南部 (膽振地方、及び日高國沙流地方) の方言に於ける日常會話の人稱法である。

二 自動詞に附いて他動詞を造る母音の接尾辭

〔4〕金田一京助博士は「ユーカラ語法摘要」(『ユーカラの研究二』 昭6) P. 171-2に於て、自動詞または形容詞から他動詞を造る語尾として *ke, re, te, ka* 等をあげ、なおその他に「*u, u, o*」を附ける特殊な方法が日常多く用いる語の上にあるのは注目し値する」とて、次のような例をあげておられる。

us (生える)	—	us-i (生やす)
as (立つ)	—	as-i (立たす)
un (はさめる)	—	un-u (はさめる)
tes (そる) ^(註1)	—	tes-u (そらす)
e を附けるもの		
tuy (切れる)	—	tuy-e (切る)
suy (ゆれる)	—	suy-e (ゆさぶる)
kay (折れる)	—	kay-e (折る)
ray (死ぬ)	—	ray-e (殺す)
ekot (死ぬ)	—	ekote (殺す)

kot (拵^(註3)つゝ) — kote (拵^(註3)つゝける)

金田一博士は以上の如くイ(ゝ)ウ(ゝ)エ(ゝ)の例しかあげておられないが、オ(ゝ)の例も僅かながら存在する(次條「5」の(1)参照)。然るにア(ゝ)に至つては全くその例を見出しがたい。このことは他の諸々の現象と相俟つてこの種の母音接尾辭の起原に關して一つの示唆を與えるものである。^(註4)

(註1) 金田一博士は、i-u, e を附けて他動詞を造る方法は「日常多く用ゐる語の上にある」と書いて居られるが、そんなことはない。むしろ、i-u, e を附けて他動詞を造るのは古い方法であり、「古い語の上に多くある」方法である。この方法は今は廢用に歸してしまひ、古い他動詞の中に「化石化した」姿で觀察されるだけである。アイヌはもはやそれらに他動詞化の機能を意識しないから、anu (置く) unu (はめる) asi (立てる) usi (附ける) などを、an (ある) un (はめる) as (立つ) us (附く) の他動詞化とは考えず、別に ante (あらしめる) 置く unte (はまらせる) はめる aste (立たせる) 立てる use (附かせる) 附ける) という他動詞を造つてゐるのである。

(註2) 金田一博士が tes を自動詞の例に擧げてゐるのも誤である。これは單獨では語根に過ぎず、ke を附して teske となる時始めて「反る」という意味の自動詞となるのであつて、次章「三」「6」(ゝ)に擧げるべき例である。

(註3) 「子音 + o + y」又は「子音 + o + w」の如き構造の語根は總べて e を取つて他動詞化する。それ以外に e を取るものは總べて「子音 + e + 子音」型の語根であつて、ここに擧げてある kote, ekote は例外である。これは kor (持つ) が kor-e (もたせる) になる様に、本来は te を附すべきものが類推で e を附したものが、或は kote > ekote, ekote > ekote であるかも知れず、本稿で問題にしてゐる e とは異なる様に思われる。

(註4) この種の母音接尾辭の起原に關しては私自身一つの説をもつてゐるが本稿では其處まで論ずる餘裕が無いので割愛する。いずれ他の機會に詳論を發表するつもりである。

「5」他動詞から母音の接尾辭を除いて得られる自動詞は、その語形の上から、次の二種に分けることができる。

(1) 「母音 + 子音」の如き構造のもの。

(2) 「子音 + 母音 + 子音」の如き構造のもの。

以上の内、(1)に屬する語例は數に於て極めて少く、僅かに四個を數えるのみである。

an (ある) — an-u (おく)

un (はめる) — un-u (はめる)

as (立つ) — as-i (立てる)

us (附く) — us-i (附ける)

これらの自動詞は種々の點から見ても、(2)に屬するものとは本質的に類を異にしている様に思われる。^(註5)

(2)に屬するものは次の諸例で、これも數に於て極めて少ない。

(1) o を取つて他動詞になるもの

mos (覺める) — mos-o (覺ます)

pop (沸騰する) — pop-o (沸騰させる)

(2) u を取つて他動詞になるもの

tuk (突出する) — tuk-u (突出す)

yak (漬れる) — yak-u (漬ぶす)

pus (押出る) — pus-u (押出す)

chup (しぼまる) — chup-u (しぼめる)

rat (下がる) — rat-u (下げる)

sep (ひろい) — sep-u (ひろげる)

(3) i を取つて他動詞になるもの

rar (拵^(註6)つゝ) — rar-i (拵^(註6)つゝける)

ran (下がる) — ran-i (下がらす)

(4) e を取つて他動詞になるもの

kay (折れる) — kay-e (折る)

ray (死ぬ) — ray-e (殺す)

say (捨れる) — say-e (捨ぶる)

ruy (つよい) — ruy-e (強く捨ぶる)

tuy (切れる) — tuy-e (切る)

これらは、獨立に自動詞として用いられるという點を除けば、あらゆる點に於て、次條以下に見て行こうとするものと共通の性質をもつ。本來同種のものであつたことは確かである。

(註) 第一、複數を造る方法が(4)と(5)とは大いに違ふ。(4)に屬するものは複數形を造るのに補充法による。

an (ある) — okay (たくさんある)

as (立つ) — roski (たくさん立つ)

un (附く) — us (たくさん附く)

これらの他動詞化したものの複數形は次の通りである。

ante (あらしめる) — okay-te (たくさん置く)

as-te (立たせる) — roski (たくさん立てる)

un-te (附かせる) — us-te (たくさん附ける)

それに對し、(4)に屬するものは -pa 附して複數形を造る。

yak (つぶれる) — yak-pa (たくさん潰れる)

tuy (切れる) — tuy-pa (たくさん斷れる)

これから出來た他動詞は、複數形を造るに當つて次の様に母音の語尾を落して -pa を附けるので、自動詞の複數形と同じになる。

yaku (つぶす) — yak-pa (たくさん潰す)

tuye (切る) — tuy-pa (たくさん切る)

第二、(4)に屬する自動詞は語形の上にアスペクトを表わすことはないのに對して、(4)に屬するものは語體の一部を反複させたり、接尾辭をとつたりして、それ自身の語形の上に複雑なアスペクトを表わす方法をもつてゐるのである。拙稿、アイヌ語法研究、『樺太廳博物館報告』四卷四號、P. 92—95 参照。

三 語根に附いて他動詞を造る母音の接尾辭

〔6〕前章に於ては、自動詞が母音の接尾辭を取つて他動詞を形成する場合に就いて専ら觀察したのであるが、本章では、語根が母音の接尾辭を取つて他動詞を形成する場合に就いて専ら觀察して見たいと思う。

母音の接尾辭を取つて他動詞を構成する語根は、前節(4)に屬するものと同じく、總べて「子音+母音+子音」の如き構造であり、これに a, i, u, y, o が附いて他動詞が形成されるわけである。かくして形成された他動詞は、更に he (頭), e (頭), ho (尻), o (尻), p (自身を), yay (自身を), p (お互を)、その他目的格の名詞等と結合して多數の自動詞を成立させている。從つてそれらのものを取去れば、本章に於て取扱うべき種類の他動詞が得られるわけである。ここではかかるものを一緒に扱うこととし、尙前章第五節〔5〕の(4)に屬する自動詞から形成された他動詞も、同類と見て、併せて取扱つて行くことにする。

(註) この種の自動詞については、古く金田一博士との共著『アイヌ語法概説』(昭和11、岩波) p. 88—90 に、私自身の集めた多數の例を挙げ、その成立をも示しておいたので、就いて見られたい。

〔7〕以下、この種の他動詞で現在までに拾ひ得た全例を、語根の母音と接尾の母音の種類に分けて、例擧して行く。

(1) o を取るもの

poso (とやす)

popo (おぼせる)

topo (かえす)

toko (突出す)

tos-o (攪拌する)
 tom-o (集中させる)
 kom-o (折曲げる)
 chop-o (ボチャボチャさせる)
 sos-o (剥ぐ)
 yok-o (狙う)
 yom-o (ちぢらす)
 mos-o (起す)

以上は例、すべて「子音+o+母音」型の語根に附いた形式(これを「-o-・o」と表記する)のものばかりである。

(2) -a を取るもの

mak-a (開く)
 mas-a (開く)
 pas-a (開く)
 has-a (開く)
 chak-a (開く)
 yas-a (裂く)
 nas-a (裂く)
 tas-a (交叉させる)
 sur-a (捨てる)

以上の例、(「-u-・a」)の1例を除くほか、悉く「-a-・a」のものであり、これは注目に値する。

(3) -e を取るもの

ray-e (殺す)
 hay-e (及ばぬ)
 nay-e (すじをつける)

kay-e (折る)
 tay-e (引く)
 say-e (巻く)
 nuy-e (彫刻する)
 huy-e (注視する)
 suy-e (振る)
 tuy-e (切る)
 muy-e (束ねる)
 ruy-e (ゆすぶる)
 tey-e (押つぶす)
 noy-e (絢う)
 moy-e (動かす)
 poy-e (まぜる)
 taw-e (ぐつと引く)
 chaw-e (解く)
 niw-e (ひきしめる)
 chiw-e (刺さす)
 piw-e (走らす)
 new-e (たのします)
 rew-e (曲げる)
 hew-e (傾ける)
 kew-e (追拂う)
 ker-e (觸れる)
 tem-e (測る)
 per-e (破る)
 nen-e (向ける)

以上29例、「子音+母音+y」または「子音+母音+w」型の語根に
 附く例が圧倒的に多数で24例を占め、其の他はすべて「-e-u」の形
 式のものばかりであることが注意を惹く。

(4) -u を取るもの

pat-u (はねとばす)
 par-u (煽る)
 tap-u (かためる)
 tak-u (蹴る)
 kat-u (形成する)
 kas-u (勝る)
 kam-u (かぶさる)
 san-u (出す)
 yak-u (つぶす)
 rap-u (羽ばたく)
 rat-u (さげる)
 ras-u (缺きとる)
 ram-u (思う)
 mat-u (擧げる)
 pir-u (拭う)
 sir-u (こする)
 kir-u (轉ずる)
 put-u (突出す)
 pus-u (内から押出す)
 tuk-u (突出す)
 tus-u (ふるわす)

yup-u (ひき緊める)
 rut-u (押し進める)
 num-u (締める)
 pet-u (裂く)
 pek-u (燃やす)
 pen-u (あげる)
 ket-u (こする)
 tes-u (反らす)
 rek-u (鳴らす)
 res-u (育てる)
 mes-u (もぐ)
 het-u (こぼす)

以上33例の中で、「-a-u」が14例、「-i-u」が3例、「-u-u」
 が7例、「-e-u」が9例である。「-o-u」が全然なく、これは注目
 に値する。

(5) -i を取るもの

tar-i (擧げる)
 char-i (まきちらす)
 kar-i (廻す)
 kas-i (勝る)
 sar-i (振向く)
 ran-i (下げる)
 (mat-i>) mach-i (もたげる)
 (rat-i>) rach-i (さげる)
 rar-i (押出す)
 pis-i (問う)

(pit-i>) pich-i (のがす)

chik-i (したむ)

chin-i (指でまさぐる)

sip-i (返す)

sis-i (避ける)

rip-i (踊る)

nik-i (豊む)

nin-i (曳く)

ris-i (むしろ)

pun-i (もたげる)

tur-i (伸ばす)

hun-i (刻む)

ruk-i (擦む)

mus-i (むせる)

pok-i (さげる) *

tok-i (トントンと音を立てる)

ror-i (沈める)

hop-i (後に残す)

以上28例の内、「-a-」は9例、「-i-」は10例、「-e-」は5例、「-o-」は4例で、「-o-」の例は見出されない。

四 他動詞の形成に見られる母音調和

〔8〕以上一二個の他動詞に就いて、語根の母音と接尾辭の母音との關係を調査した結果、下の如き數表(第一表)を得た。

〔9〕この數表の詳細なる検討は後日の研究に俟ちたいと思うが、取敢えず私の注意は次の諸點に惹かれるのである。

接尾 他動詞 語根	-a-	-i-	-u-	-e-	-o-	合 計
-a-	9	9	14	8	×	40
-i-	×	10	3	3	×	16
-u-	1	5	7	6	×	19
-e-	×	×	9	9	×	18
-o-	×	4	×	3	12	19
合 計	10	28	33	28	12	112

(一) i, u, e の例が斷然多く、それに比して a, o の例が極めて少い。このことは、この種の母音接尾辭の起原を暗示する一つの資料であるが、本稿の目的とは直接の關係がないので、ここではこれ以上の論述を省く。

(二) 接尾辭の母音が語根の母音に一致する例が多い。接尾辭 o に於ては全部の例が語根の母音に一致し、接尾辭 u に於ても唯一例を除いてはそうであり、u に於ても語根の尾母が a 及び i に終つてゐる場合の外は同様である。このことは、

tuk (つきでる) — tuk-u (つきたす)
tok (つきでる) — tok-o (つきたす)

pus (おしでる) — pus-u (おしだす)

pos (語根、單獨で使われず) pos-o (つらぬく)

等の如く、本来同一の語だつたと思われるものがやはり同様であること、アイヌ語に於ては母音の前進的同化の例の多いこと、などの事實と相俟つて、明かに接尾辭の母音が語根の母音の影響の下に變化したものであることを示すものと思われる。

(三) 語根の母音が *o* で接尾辭が *a* の例 ($[-o:-a])$ も、その反對の例 ($[-a:-o])$ も存在しない。また語根の母音が *o* で接尾辭が *u* の例 ($[-o:-u])$ も、その反對の例 ($[-u:-o])$ も見出されない。

語根の母音が *a, u, e, i* の内のいずれかである場合には、接尾辭もその何れかでなければならず、また語根の母音が *o, e, i* の何れかである場合には、接尾辭もまたその何れかでなければならぬ。今母音を、

甲類 — *a, u*

乙類 — *o*

丙類 — *e, i*

の三種に分けるならば、甲類と丙類、或は乙類と丙類は、この類の他動詞の中で共存することができけれども、甲類と乙類は共存することができないのである。

以上に依つて、所謂「母音調和」が、アイヌ語の古い他動詞の形成法の中に行なわれていたと斷じていいいと思うのである。

(註1) これについては二、[4]、註4、参照。

(註2) 語根の尾音が *a* 及び *u* に終っている場合には例外なしに語尾に *o* を附けて他動詞を造る。

(註3) 例えば次のような例がある。

tomari (渡泊所) → tomara (同、樺太鵡城方言)
nak-o (後方へ) → maka- (同、雅語)
rike- (上方へ) → riki- (同、雅語)
erum (ぬすみ) → erem (同、鵡城方言)

menoko (女) → meneko (同、樺太方言)
ontaro (大樽) → ontoro (同、鵡城方言)
hoku (夫) → hoko (同、樺太方言)
tokuy (親友) → tokoy (同、樺太方言)
omumpe (ずぼん) → opompe (同、樺太方言)
kosonte (小袖) → kosonto (同、樺太方言)
ohetu (空ける) → ohotu (同、鵡城方言)
ohewe (かしげる) → ohowe (同、鵡城方言)

五 名詞の人稱形の語幹形成に見られる母音調和

[10] 名詞の概念形に附いて人稱形の語幹を造る語尾として、*a, u, o* の五つが存在することは、すでに第一章の「2」に於て見た通りである。この五つの母音語尾は、人稱形の語幹を造るという機能に於ては、全く同價值である。この様に全く同一の機能を持つものが、*a, u, o* の五つに分れてゐるのは、何故であらうか。前記の他動詞の場合などを参照する時、これもひよつとしたら母音調和ではなからうか、とは容易に考えつくところである。

その様な考えから、とりあえず單音節の名詞を擇んで、その全例に亘つて、それが人稱變化する場合を調査してみた。

(註) 本當は名詞の全例に亘つて調査したものを發表すべきであるが、今はその餘裕がない。しかし、アイヌ語に於ては多音節の語はたいい單音節の意義單位に還元できるようだし、また多音節の名詞の人稱語幹の形成はその最後の音節に於て決定され、それが單音節の名詞の人稱語幹の形成法と殆ど一致するようと思われるので、單音節の名詞だけを取上げて名詞の人稱語幹の形成法の意義をつかむのには別に差支へはないと信ずる。

[11] アイヌ語の單音節は、要素の數とその配列の順序によつて、次のように分けることができる。

單音節

開音節のもの

「母音」だけのもの

「子音+母音」のもの

「母音+子音」のもの

「子音+母音+子音」のもの

閉音節のもの

しかし、名詞についてこれを見れば、母音だけのものは一つもない。^(註)そこで、單音節の名詞の音節構造は次のようになる。

單音節名詞

開音節のもの (子音+母音)

閉音節のもの (母音+子音)

「子音+母音+子音」

(註) 母音だけの意義單位はある。e (頭)。o (尻)。しかし、これらは合成語の第一要素としてのみ用いられ、人稱語幹を造ることはない。

〔12〕開音節の單音節名詞に於ける人稱語幹の形成法は、大別して二つの場合に分けることができる。

(一) 概念形の母音が a, e, o の場合は、人稱語幹もそれと同じ母音を語尾にとる。

(1) 概念形の母音が a で、人稱語幹の語尾も a のもの。〔a-a〕と書く。

(2) 概念形の母音が e で、人稱語幹の語尾も e のもの。〔e-e〕と書く。

(3) 概念形の母音が o で、人稱語幹の語尾も o のもの。〔o-o〕と書く。

(二) 概念形の母音が i 及び u の場合は、人稱形語幹は、北海道に於ては -e、樺太に於ては -he を語尾にとる。

(4) 概念形の母音が i で、人稱語幹の語尾が e (或は -he) のもの。〔i-(h)e〕と書く。

(5) 概念形の母音が u で、人稱語幹の語尾が e (或は -he) のもの。〔u-(h)e〕と書く。

〔13〕以下、開音節の單音節名詞の全例について、その概念形及び人稱形の語幹を掲げる。

(人稱形の語幹には譯語を附けることはできないのであるけれども、人稱形の語幹はゼロの人稱接頭辭を取つて——つまりそのままの形で——第三人稱の形になるので、今はわかりやすくするために、以下すべて第三人稱の形とみなしてそれに相當する譯語を附けることにする。なお上段に概念形、中段に人稱語幹の弱形、下段に人稱語幹の強形——充分に發音した時の形——を記載する。)

(1) 〔a-a〕のもの

ka (米) — ka-a (彼の米) — ka-ha (同)

sa (姉) — sa-a (彼の姉) — sa-ha (同)

ya (鰯) — ya-a (彼の鰯) — ya-ha (同)

ra (肝臟) — ra-a (彼の肝臟) — ra-ha (同)

pa (年) — pa-a (彼の年) — pa-ha (同)

cha (枝條) — cha-a (彼の枝條) — cha-ha (同)

(2) 〔e-e〕のもの

ke (油) — ke-e (彼の油) — ke-he (同)

me (寒氣) — me-e (彼の寒氣) — me-he (同)

ye (膿) — ye-e (彼の膿) — ye-he (同)

re (名) — re-e (彼の名) — re-he (同)

pe (汁) — pe-e (彼の汁) — pe-he (同)

(3) 〔o-o〕のもの

ko (粉) — ko-o (彼の粉) — ko-ho (同)

so (坐席) — so-o (彼の坐席) — so-ho (同)

to (乳房) — to-o (彼の乳房) — to-ho (同)

po (子) — po-o (彼の子) — po-ho (同)

(註1) [-i·-ye] (北海道) [-i·-he] (樺太)

ki (稗) — ki-ye (彼の稗) — ki-ye-he (同)

— ki-he (同上)

ni (木) — ni-ye (彼の木) — ni-ye-he (同)

— ni-he (同上)

pi (種) — pi-ye (彼の種) — pi-ye-he (同)

— pi-he (同上)

chi (陰莖) — chi-ye (彼の陰莖) — chi-ye-he (同)

— chi-he (同上)

(5) [-u·-ye] (北海道) [-u·-he] (樺太)

ku (馬) — ku-he (彼の馬) (註1)

su (鍋) — su-he (彼の鍋) (註2)

tu (弦) — tu-he (彼の弦) (註3)

pu (倉) — pu-he (彼の倉) (註4)

nu (豊漁) — nu-ye (彼の豊漁) — nu-ye-he (同)

— nu-he (同上)

ru (跡) — ru-ye (彼の跡) — ru-ye-he (同)

— ru-we (同上) — ru-we-he (同)

— ru-he (同上)

(註1) 北海道では ku (弓) の人稱形がない。これを他の例にならうて ku-

ye, ku-ye-he とすれば, kuy (尿) の人稱形 kuy-e (彼の尿) kuy-e-he

(同) とまぎれるからである。それで人稱形を使う必要があるような場合は, kor ku (彼の弓) e-kor ku (君の弓) ku-kor ku (私の弓) などのような云う方をする。

(註2) 同様に, su (鍋) の人稱形もなう。su-ye, su-ye-he とすれば, suy (穴) の人稱形 suy-e (彼の穴) suy-e-he (同) とまぎれるからである。

5。

(註3) 同様に, tu (弦) の人稱形もなう。tu-ye, tu-ye-he とすれば, tuy (腹の中) の人稱形 tuy-e (彼の腹の中) tuy-e-he (同) とまぎれるからである。

(註4) 同様に, pu (倉) の人稱形もなう。pu-ye, pu-ye-he とすれば, puy (穴) の人稱形 puy-e (彼の穴) puy-e-he (同) とまぎれるからである。

[14] 閉音節の單音節名詞とその人稱形の語幹を示せば次の通りである。(人稱形はその弱形のみ示す。強形は弱形から規則的に造られるか5。)

(1) 概念形の母音が a で、人稱形の語幹の語尾の母音が a のもの。

[-a·a] 二例。

sam (同) — sam-a (彼の側)

sar (尾) — sar-a (彼の尾)

(2) 概念形の母音が i で、人稱形の語幹の語尾の母音が a のもの、

[-i·a] 無例。

(3) 概念形の母音が u で、人稱形の語幹の語尾の母音が a のもの。

[-u·a] 無例。

(4) 概念形の母音が e で、人稱形の語幹の語尾の母音が a のもの。

[-e·a] 無例。

(5) 概念形の母音が o で、人稱形の語幹の語尾の母音が a のもの。

[-o·a] 無例。

(6) 概念形の母音が a で、人稱形の語幹の語尾の母音が i のもの。

[-a·i] 一二例。

ak (弟) — ak-i (彼の弟)

ap (釣針) — ap-i (彼の釣針)

am (爪) — am-i (彼の爪)

rat (痰) ——(rat-i>) rachi (彼の痰)
 mat (女) ——(mat-i>) machi (彼の女)
 sar (茅原) ——sar-i (彼の茅原)
 hat (葡萄) ——(hat-i>) hachi (彼の葡萄)
 has (小枝) ——has-i (彼の小枝)
 tat (樺皮) ——(tat-i>) tachi (彼の樺皮)
 tar (荷繩) ——tar-i (彼の荷繩)
 tam (刀) ——tam-i (彼の刀)
 kam (肉) ——kam-i (彼の肉)

(7) 概念形の母音が i で、人稱形の語幹の語尾の母音が i のもの。
 [-i-i] 111 例。

rit (筋) ——(rit-i>) richi (彼の筋)
 rir (潮) ——rir-i (彼の潮)
 mit (孫) ——(mit-i>) michi (彼の孫)
 nip (柄) ——nip-i (彼の柄)
 nit (串) ——(nit-i>) nichi (彼の串)
 nik (疊目) ——nik-i (彼の疊目)
 nis (雲) ——nis-i (彼の雲)
 ik (節) ——ik-i (彼の節)
 is (尾) ——is-i (彼の尾)
 sit (纖維) ——(sit-i>) sichi (彼の纖維)
 sik (目) ——sik-i (彼の目)
 sir (地) ——sir-i (彼の地)
 pit (小石) ——(pit-i>) pichi (彼の小石)
 pir (傷) ——pir-i (彼の傷)
 kip (額) ——kip-i (彼の額)
 kik (危機) ——kik-i (彼の危機)

kir (脚) ——kir-i (彼の脚)
 chip (舟) ——chip-i (彼の舟)
 chit (女陰) ——(chit-i>) chichi (彼の女陰)
 chis (山) ——chis-i (彼の山)
 chir (鳥) ——chir-i (彼の鳥)
 chin (脚) ——chin-i (彼の脚)

(8) 概念形の母音が u で、人稱形の語幹の語尾の母音が i のもの。
 [-u-i] 111 例。

yup (兄) ——yup-i (彼の兄)
 yuk (鹿) ——yuk-i (彼の鹿)
 rup (群) ——rup-i (彼の群)
 rur (海 水) ——rur-i (彼の海水)
 rus (毛 皮) ——rus-i (彼の毛皮)
 rum (矢 の 根) ——rum-i (彼の矢の根)
 mun (草) ——mun-i (彼の草)
 muk (胸) ——muk-i (彼の胸)
 mur (糠) ——mur-i (彼の糠)
 nup (野) ——nup-i (彼の野)
 num (粒) ——num-i (彼の粒)
 up (魚の白子) ——up-i (彼の魚の白子)
 ut (肋) ——(ut-i>) uchi (彼の肋)
 us (灣) ——us-i (彼の灣)
 ur (毛 皮) ——ur-i (彼の毛皮)
 sut (祖 母) ——(sut-i>) suchi (彼の祖母)
 sum (油) ——sum-i (彼の油)
 hup (瘤) ——hup-i (彼の瘤)
 hut (祖 母) ——(hut-i>) huchi (祖母)

hum (音) — hum-i (彼の音)
 hur (山) — hur-i (彼の山)
 pus (穗) — pus-i (彼の穗)
 tus (綱) — tus-i (彼の綱)
 tur (垢) — tur-i (彼の垢)
 kut (帶) — (kut-i>) kuchi (彼の帶)
 kur (影) — kur-i (彼の影)
 chup (腹) — chup-i (彼の腹)
 chuk (秋) — chuk-i (彼の秋)

⑨ 概念形の母音が e で、人稱形の語幹の語尾の母音が i のもの。
 [-e-i] 10例。

rek (髻) — rek-i (彼の髻)
 net (漂木) — (net-i>) nechi (彼の漂木)
 sem (納屋) — sem-i (彼の納屋)
 set (臺) — (set-i>) sechi (彼の臺)
 pet (川) — (pet-i>) pechi (彼の川)
 pes (厠) — pes-i (彼の厠)
 tes (列) — tes-i (彼の列)
 kep (額) — kep-i (彼の額)
 ker (沓) — ker-i (彼の沓)
 kem (針) — kem-i (彼の針)

⑩ 概念形の母音が o で、人稱形の語幹の語尾の母音が i のもの。
 [-o-i] 19例。

hot (一 摘) — (hot-i>) hochi (彼の一節)
 hos (脚 絆) — hos-i (彼の脚絆)
 hom (關 節) — hom-i (彼の關節)
 hon (腹) — hon-i (彼の腹)

pok (下) — pok-i (彼の下)
 top (竹) — top-i (彼の竹)
 kop (塊) — kop-i (彼の塊)
 kot (跡) — (kot-i>) kochi (彼の跡)
 kor (蔭の葉) — kor-i (彼の蔭の葉)
 mos (蠅) — mos-i (彼の蠅)
 mon (手) — mon-i (彼の手)
 not (口) — (not-i>) noch i (彼の口)
 nok (卵) — nok-i (彼の卵)
 non (唾) — non-i (彼の唾)
 op (矛) — op-i (彼の矛)
 ot (死 棺) — (ot-i>) ochi (彼の死棺)
 ok (悲) — ok-i (彼の悲)
 os (中) — os-i (彼の中)
 sos (層) — sos-i (彼の層)

⑪ 概念形の母音が a で、人稱形の語幹の語尾の母音が u のもの。
 [-a-u] 17例。

hap (梢) — hap-u (彼の梢)
 ham (葉) — ham-u (彼の葉)
 pas (消炭) — pas-u (彼の消炭)
 tap (肩) — tap-u (彼の肩)
 tak (塊) — tak-u (彼の塊)
 tas (呼氣) — tas-u (彼の呼氣)
 kap (皮) — kap-u (彼の皮)
 kat (形) — kat-u (彼の形)
 char (口) — char-u (彼の口)
 yam (葉) — yam-u (彼の葉)

rap (羽) — rap-u (彼の羽)
 ram (心) — ram-u (彼の心)
 ras (片) — ras-u (彼の片)
 rar (眉) — rar-u (彼の眉)
 nan (顔) — nan-u (彼の顔)
 at (紐) — at-u (彼の紐)
 am (爪) — am-u (彼の爪)

112 概念形の母音が i で、人稱形の語幹の語尾の母音が u のもの。
 [-i-u] 一例。

mim (肉) — mim-u (彼の肉)

113 概念形の母音が u で、人稱形の語幹の語尾の母音が u のもの。
 [-u-u] 三例。

tum (中) — tum-u (彼の中)
 kus (改) — kus-u (彼の改)
 tur (垢) — tur-u (彼の垢)

114 概念形の母音が e で、人稱形の語幹の語尾の母音が u のもの。
 [-e-u] 一例。

kep (額) — kep-u (彼の額)

115 概念形の母音が o で、人稱形の語幹の語尾の母音が u のもの。
 [-o-u] 無例。

116 概念形の母音が a で、人稱形の語幹の語尾の母音が e のもの。
 [-a-e] 三例。

haw (聲) — haw-e (彼の聲) — haw-he (同上、樺太)
 aw (舌) — aw-e (彼の舌) — aw-he (同上、樺太)
 maw (風) — maw-e (彼の風) — maw-he (同上、樺太)

117 概念形の母音が i で、人稱形の語幹の語尾の母音が e のもの。
 [-i-e] 一例。

chiw (波) — chiw-e (彼の波) — chiw-he (同上、樺太)

118 概念形の母音が u で、人稱形の語幹の語尾の母音が e のもの。
 [-u-e] 七例。

ruy (砥石) — ruy-e (彼の砥石) — ruy-he (同上、樺太)
 muy (束) — muy-e (彼の束) — muy-he (同上、樺太)
 suy (穴) — suy-e (彼の穴) — suy-he (同上、樺太)
 puy (穴) — puy-e (彼の穴) — puy-he (同上、樺太)
 nuy (焰) — nuy-e (彼の焰) — nuy-he (同上、樺太)
 tuy (中) — tuy-e (彼の中) — tuy-he (同上、樺太)
 kuy (尿) — kuy-e (彼の尿) — kuy-he (同上、樺太)

119 概念形の母音が e で、人稱形の語幹の語尾の母音が e のもの。
 [-e-e] 三例。

kew (屍) — kew-e (彼の屍) — kew-he (同上、樺太)
 tek (手) — tek-e (彼の手)
 kes (末) — kes-e (彼の末)

120 概念形の母音が o で、人稱形の語幹の語尾の母音が e のもの。
 [-o-e] 四例。

moy (灣) — moy-e (彼の灣) — moy-he (同上、樺太)
 soy (外) — soy-e (彼の外) — soy-he (同上、樺太)
 toy (土) — toy-e (彼の土) — toy-he (同上、樺太)
 koy (浪) — koy-e (彼の浪) — koy-he (同上、樺太)

121 概念形の母音が a で、人稱形の語幹の語尾の母音が o のもの。
 [-a-o] 一例。

par (口) — par-o (彼の口)

122 概念形の母音が i で、人稱形の語幹の語尾の母音が o のもの。
 [-i-o] 無例。

123 概念形の母音が u で、人稱形の語幹の語尾の母音が o のもの。

〔-u-o〕無例。

〔24〕概念形の母音がeで、人稱形の語幹の語尾の母音がoのもの。

〔-e-o〕無例。

〔25〕概念形の母音がoで、人稱形の語幹の語尾の母音がoのもの。

〔-o-o〕三例。

tom (中) — tom-o (後の中)

kok (格) — kok-o (後の格)

or (内) — or-o (後の内)

〔15〕以上の結果をまとめると次の数表(第二表)を得る。

接尾 他動詞 語根	-a-	-i-	-u-	-e-	-o-	合 計
-a-	8	12	17	3	1	41
-i-	×	22	1	1	×	24
-u-	×	28	3	7	×	38
-e-	×	14	7	8	×	29
-o-	×	19	×	4	7	30
合 計	8	95	28	23	8	162

〔15〕 前條の第二表を〔8〕に掲げた第一表と比較する時、語根の

母音と語尾の母音との關係が、あまりによく似ているのに驚かされるのである。

〔1〕-i, -u, -oの例が斷然多く、それに比して -e, -o の例が極めて少い。このことは、この種の母音接尾辭の起原を暗示する一つの資料であるが、本稿の目的とは直接の關係がないので、ここではこれ以上の論述を省く。

〔二〕ここでも接尾辭の母音が語根の母音に一致する例が多い。接尾辭 -a に於ては全部の例が語根の母音に一致し、接尾辭 -o に於てもただ一例を除いてはそうであり、-u に於ても語根の尾音が -u 及び -e に終つてゐる場合のほかは同様である。このことは、

tum (中) tum-u (その中)
tom (中) tom-o (その中)

の如く本來同一の語だつたと思われるものがやはり同様であること、アイヌ語に於ては母音の前進的同化の例の多いこと、などの事實と相俟つて、あきらかに接尾辭の母音が語根の母音の影響のもとに變化したものであることを示すものと思われる。

〔三〕第一表と第二表との間に見られる重要な差異は、第二表に於て〔-a-o〕の例が、わずかに一個だけではあるが、存在することである。

それは paro (彼の口) という語であるが、單音節のみでなく多音節まで含めたあらゆる名詞に於て、〔-a-i-o〕とあるのはこの語だけである。

金田一京助博士は、

paro (口) — paro-ho (其の口)

と書いておられる(『ユーカラ語法摘要』P.35)。すなわち paro の形を以て概念形としておられるのである。それだと問題はなくなるわけであるが、それは博士の誤であり、正しくは、

par (口) — paro (後の口) — par-o-ho (其)

とすべきものである。この語は、北海道中北東部方言及び樺太方言では

char (口) — char-u (後の口) char-u-hu (四)

の如く、[a・u]の形式をとる點から見ても察しられる通り、本來は

par (口) — par-u (後の口)

であつたと思われるので、しばらく計算の外に置いてよいように思われる。すると、(口)でも [o・a] [a・o] [o・u] [u・o] 等の組合せは存在しないことになり、[9]に於て見たのとそっくりの形式で母音調和が行われていた、と考えることができる。すなわち、語根の母音が a, u, e, i の内のいずれかである場合には、接尾辭もその何れかでなければならず、また語根の母音が o, e, i の何れかである場合には接尾辭もまたその何れかでなければならぬ。今、母音を

甲類 — a, u

乙類 — o

丙類 — e, i

の三種に分けるならば、甲類と丙類、或は乙類と丙類は、名詞の人稱形の語幹の中で共存することができるけれども、甲類と乙類は共存することができないのである。

(註1) この種の母音接尾辭の起原は *u* (それ、彼) だつたと思われる。これが名詞に接尾して第三人稱の形ができた。例えば *hon* (腹) に *u* (彼) のが附つて *hon-u* (彼の腹) となり、それが後に各人稱形の語幹になつたものと思われる。この *u* は、今はもっぱら接頭辭として、*Isapa* (彼の・頭)、*i-tanehe* (その・種子)、*ian* (それが・ある)、*i-pon* (それが・小さい) —— 以上、日高國様似方言 —— の様に方言によつてはかなり自由に用いられる。*u* は *u* からでた。それで人稱語幹の語尾として *i* でも *u* でもよいという例が非常に多いのである。『アイヌ語法概説』P. 20—21 参照。でも *u* からでた。それで概念形が *-w* 及び *-y* で終る名詞は、人稱形の語尾として *u* を取るべきであるが、そうすると *wa* 及び *ya* というようなアイヌ語に存在しない音節ができるのでそれを開いて *u* にしたものと思われる。

(註2) 概念形が *-w* 及び *-y* に終つてゐる名詞は *-ye* *-e* (北海道)、*-te* *-e*

u (樺太) を以て人稱語幹を造る。その理由は前述の通りである。

(註3) その例は「9」註3に就いて見られたい。

六 結 語

〔17〕母音調和はウラル・アルタイ系諸言語の顯著な特徴とされてゐるものである。ウラル・アルタイ特有の現象で「餘所には無い」とまで云いきつてゐる學者もある。^(註1) けれども母音調和とは、母音の同化作用が高度に行われて文法上の形式にまで組織化された現象にすぎないのであるから、他系の言語にそれが見出されたとしても少しも不思議ではない筈である。現にアメリカの諸語にそれが見出されるというし、^(註2) アフリカのバンヅウ諸語にもあるという。^(註3) アイヌ語に於ける母音調和については、從來その存在が否定されてゐたのであるけれども、私は上に示したような新しい根據の上に立つて、改めてその存在を主張しようとするものである。なお、詳細な研究の發表は他日を期したいと思う(一九五二・二・二二・病床にて)。

(註1) 金田一京助「日本語」(創元社版、アジア問題講座第八卷、『氏族・歴史篇二』、昭14) 五一—七頁。

(註2) 高橋盛孝『北方諸言語概説』(昭18)、四八—九頁。

(註3) 五島忠久「スワヒリ語における母音調和について」(日本音聲學會編『音聲の研究』、昭26)、六一—七四頁。

(註4) 金田一京助「ユーカーラ語法摘要」、三八頁。高橋盛孝『北方諸言語概説』四六頁。